特31
674

西洋易知錄卷之三

河津孫四郎　譯述

第三世紀

第一篇　查理曼帝（シャルレマン）の事

要　紀元八百年教公レオ第三羅馬（ローマ）城に於て查理曼を西帝とする

是より先き說し如く西歐羅巴（ヨロッパ）の羅馬帝國瓦解の後諸國分裂し多りしが再ひ又一紛して一大强國となる時至まり之を統一して四十三年の間掌握し多く英雄を即ち查理曼多り

査理曼（シャルレマン）は紀元七百四十二年に生まれ父は佛國王北比諾（ピン）にして母をベルタといへり父北比諾の王位に登りしかば査理曼はいまだ幼稚なりしかども北比諾王薨ずるとき兄カルロマンと共に佛國（フランス）を分與せられさうカルロマンはニーストリア。ボルゴンヂーの二國を領し（即ち佛國の北地中國（ゼルマン））査理曼（シャルレマン）は及ひ其他日耳曼の屬國（ゼルマン）を領しなり

査理曼（シャルレマン）の位に即くや直ちにアコイテーンを征伐し速に之を平定しなり此とき兄のカルロマンは薨しなりしかカルロマン附屬の重臣等相議してカルロマンの諸子を立てんと即ち査理曼に上書してカルロマンの國をも合せ領し給はんことを願ひしなり頃は紀元七百七十一年にして査理曼二十九歲の時なりき

史家査理曼（シャルレマン）在位の時間を二段に分つ第一段は七百七十一年より八百零四年撒克遜（サクソン）人降服の時に至り第二段は同年より殂落の時まで（但し第二段は即ち査理曼の戰爭を止め侵地を治る時をいふなり）

査理曼の為せし戰爭の敵は里尼（ライン）河の外に住ひする撒克遜（サクソン）人伊太利（イタリヤ）の倫巴爾（ロンバル）人。是班牙（スパニヤ）にある回教の徒匈牙利（オンガリー）に住ひするアバルス人なり査理曼又嗹（デン）人及びスクラボニアン種族の民と合戰せしことなり

査理曼（シャルレマン）國政を行ふに日耳曼（ゼルマン）の古法は國民の深く愛を

る所ふれい教て之を取行ひ羅馬教公い宗旨の歸する所ふれば之を助くて諸民の心を懐くり是を查理曼の國を治る二大眼目ありサクソンス撒克遜人い衆神教を奉しくるが查理曼い之を降して西教を弘めんと欲し紀元七百七十二年オルムスの會議に於て國兵を擧げ撒克遜人の國に發向し直にイレスビュルグ城を降し「イルミンシュル」と唱へる撒克遜第一の大佛を毀てり抑此像い甲冑を着る兵士の木像にて平常い廣き宮社の中に大理石の圓柱を立て其上に之を安置し戰爭のときい僧侶之を戰場に引出し戰爭終るとき所有俘虜及ひ怯懦の者を殺して此神を祭

りくるとき撒克遜人の習いしりきして查理曼い之を粉の如く打碎きて大理石の圓柱い之を地に埋めけて撒克遜人い之を見て大に恐怖直に和睦を乞ひ十二人の人質を獻しくり

撒克遜人い大事なるとき國王を立て其事終るときい國王も他の頭人と同列となる然る處こに ウィッチカインドと唱へる一人の豪傑起りしが才智を以て數年の間國王の如き威權を奮ひくり此人い勇氣ありくき人國民を說き勸めて數查理曼に反らしめし程に查理曼も全く之を平定するまでにい數此地に發向しくり查理曼い撒克遜の要城イレスビュルグ。シギスビュルグ

の二城を取りて之を其本営とふし數撒克遜の兵と打破りしが和睦して兵を引き擧げ歸國しる頃ゆい撒克遜人又謀反を企て舊の如く衆神教を奉し西教門の僧徒を殺しゝり是の如きこと數年遂ゆ紀元七百七十九年ゆ到りし愛査理曼いもゝや寛ゝる所置ゆも倦ミ果てゝゝば一擧ゆ此地ゆ押し寄せ直ゴ之を打滅して群縣とふし僧官ゆ命して西教を説ゝしめ新ゆ律令を作りて此國を治めゝり律令の厳酷ゝりしことい如何様の罪を侵をとも大抵死罪を免ゝること能いざりしとぞ

紀元七百七十七年ゆ於て撒克遜王ウィッチカインドを

嗹王の方ゆ出奔しゝりしが撒克遜の平定せし後又其國ゆ歸りシンタルと云ふ處を愛して佛郎西の一軍を打破りゝり査理曼此事を聞くと等しく怒り忽ち頭上より起り直ゆ兵を擧て撒克遜の國ゆ趣きウィッカンドゆ與して戦ひし者凡て四千五百人を鏖ゆしゝれバウィッチカンドを又嗹王の許ゆ出奔しゝり其翌年即ち紀元七百八十三年ウィッチカンド又撒克遜の國ゆ歸り謀反を企てし査理曼の為めゆ二度大敗を取りしゝバウィッチカントを遂ゆ戦争を為をとも勝ちが多ことを察し此後を謀反を企つることもゝりゝ然しその後も撒克遜人い謀反を起をこと屢ゝりしが遂ゆ査理曼ゆ打勝つ

こと能はざる紀元八百零四年に於て全く降服しぬ
るが査理曼は其國の民凡一萬人を徙してフランドル
ブラバント及ひ佛國の諸郡に散布しぬ
査理曼の后は伊太利倫巴爾人の王デシデリュースの女
なりしが後査理曼之を離縁してヒルデガルドと
る婦人を后とせしよりデシデリュースと自然不和を醸
しぬるれば羅馬教公と倫巴爾人と軍の時に至り教
公アドリアン第一より査理曼に援兵を乞ひぬるに査理曼之
を容易に承け引き直に兵を率ひて牙白山を越へ二隊
に分きて伊太利に攻め入りぬるが敵兵更に之を支ふ
者ふく倫巴爾王はパヒア城に籠りぬる査理曼の兵へ

ロマ城を取りぬる處城中に兄カルロマンの寡婦及ひ
其諸子居住せり此人くはは査理曼の誅を恐れてデシ
リュースの許へ逃れ来りしぬる此人くは此後如何ぬる
果てしや今之を傳へざれども倫巴爾の諸城は風を望
んで降參しぬれども唯パヒア城のみは堅く守て下ら
ざりしぬば査理曼は暫く兵を已めて羅馬城に趣き此
地より歸りて再ひパヒアに攻め懸りその粮道を絶て
嚴しく之を圍みぬるば城中飢饉に得堪へず遂に開城
して デシデリュースを査理曼に附與しぬる査理曼則ち
デシデリュースを一寺に幽し自ら倫巴爾治王と稱し其
國傳来の鉄冠を冠りぬる時に紀元七百七十四年に

り

その前つゝ是班牙に移住し多く回々教の徒「アバシレード」朝の回王即ち亞剌伯王に背きて一箇の國を起し多り是とコルドハの回國とり〻然れども此國未だ穩ならず尚心服せざる者ぞ多うり多れバ或る不平の徒査理曼と是班牙に迎へ此地の新政府を覆さんと謀りけり査理曼ハその迎へに應じ祖父の如く耶蘇教門を護りし功を顯ハさんと欲し即ちその兵を引率して是班牙に發向しより時に紀元七百七十八年なり是時査理曼ハ伊太利の後に取用ひたる軍法に倣ひ兵を諸所に分ちて諸道より一齊にサラゴサ城に攻め寄せ其兵此城を攻め落しられハナハルレアラゴンの地盡く風と望んて査理曼に降服しより是に於て比列尼斯山の南に佛郎西の屬國起りより是を名づて是班牙マルチと云ひしかども査理曼ハ凱陣して佛郎西に歸りけるときれども後陣をいまゝ佛郎西に入らんとロンセバルレスの山路に懸りしときバスクス人（又バスコンの為に人とも）の為に厳ハに散くに打破られ此とき討死しし者の中に不利太尼侯ローランドとて査理曼の甥にして古人の詩又ハ小説に此人の武名を唱へしこと多し

バハリア公タッシロを倫巴爾治王デシデリュトスの女壻なり倫巴爾治の査理曼に滅されしこと

曼を叛して竊かに アバルス人を迎へ入れり然るに其旨露顯しありしかば查理曼ハタッシロを捕獲して之を寺に押し込めたり然るに アバルス人を約束の如くバハリアを攻め入りしかば查理曼を迎へ討て之を破り北方に追て匈牙利(フンガリー)河に至りたり此時查理曼を散克遜(サクソン)人の佛國(フランス)を侵寇せし由を聞きしかば(此時ハ散克遜人平定の前なりしゆへなれども疑ふことあり)太子ペピンに命じて アバルス人と戰ハしめ其身を佛國に歸りたりしかるにペピンハ紀元七百九十六年に於てリシング砦を取り此砦ハブダ府の一砦にして多く金銀を貯へありしを佛郎(フランス)西を此地を取りしより歐羅巴(ヨーロッパ)中の富國となりたり

其戰爭中に查理曼ハ多腦(ダニューブ)河より里尼(ライン)河まで一大長溝を掘んことを企てしかが其事業を果さざるに アバルス人ハ紀元七百九十九年に於て查理曼に背きしかば又破られしかが遂に滅されたり今に尚カウカシュス山に同じき名の小部落ありこれぞ查理曼の為に滅されし アバルス人の僅かに殘せしものなるべし

吾邑今查理曼(シャルルマン)在位中の至要紀事を說んに頃ハ紀元八百年四月某日羅馬(ローマ)城に賊黨起りて教公レオ第三を街に於て傷(ケガ)レオハ癈痍へてよりバデルボルンに趣き查理曼に見へしかば查理曼厚くこを饗應し貴人九人に命じて護衛せしめこれを伊太利(イタリア)に送り查理曼も亦伊

太利羅馬城(ローマ)まで趣きゝる去る程なる十二月廿五日とふ
る是ぞ査理曼(シャルレマン)即位と定めし日なて伊太利佛郎西其餘
査理曼(シャルレマン)なる附屬しゝる地の貴人高僧金紫の麗服を着し
て聖波得(サンピートル)の像の前後なる會集せり其中なる容貌堂々眼爛
ことしゝる君主問ふべと知るべき英雄豪傑の査理曼
を身なる羅馬貴人(ローマ)の禮服を着して聖波得(サンピートル)の前なる跪き頭
を地なる俯して禮拜を行ひ、ゝる須臾(しばらく)して天下第一の貴
僧教公レオ趨(ポプ)を寄せて査理曼の頭上なる冠を戴せ(シャルレスオーギュスチュ)り
此時四面より一齊なる賀して羅馬人の帝査理澳額西土
斯長壽万福万邦歸服と叫ぶり々是なる於て乎教公レ
オ第三査理曼を西帝とふ以て中絶せし西帝國を再

立しゝり此時査理曼云く我此の如くせるんことを
知らば羅馬の寺院なる趣きしなとひられど
もその宿志ハ蓋しこの位を賤んこと我謀りしふなへ
査理曼(シャルレマン)い紀元七百八十一年なる於て早くも信實ふる副
王ふきこゝを得(ビルマニー)を察し即ち國を分ちて諸子なる子
へ其子査理(シャルレス)なる日耳曼(ゲルマニー)なる封し子路易(ルイス)ハアコイテーンなる
封し子ペピン(ペピン)なる伊太利(イタリー)なる封しゝり査理曼ハ此の如く
して廣き國境を諸子なる守らしめられば晩年なるハ大拉
軍(サ)と為をことふゝりゝる三子の中査理(シャルレス)ペピンの二子
い査理曼なる先だちて薨しゝり

査理曼（シャルレマン）ハ身エースラシヤーベルなる宮中ニ在りといへども其威權の大なりしこと い東帝を更なり亞剌伯（アラビヤ）の回王ニ至るまで皆査理曼と交りを結ぶ程なりし然し査理曼ハ西歐羅巴（ヨウロッパ）の事ニ多く心を用ひ且つ入査理曼の憂へしその一箇なり但し自ら恐るしニ非ず子孫の為ニ憂へしなり是ハ何者ぞとなれバ其頃ノルスメン人と唱へる夷英吉利（イギリス）及び佛郎西（フランス）の海岸を侵ふしなることなどなくして査理曼ハ其必ず佛國（フランス）を脳まん為ニこと欲察し大ニ之を憂へしとぞ

紀元八百十四年査理曼殂落（ロイヒス）ス其前年査理曼ハ貴人を集會して太子路易（ロイヒス）ニ帝冠を与へ

此人ハ性質勉勵ニして一分時なりとも無益ニ費ス事とふく衣服を着るときニ當りてハ諸士官の勤怠を問ひ糾し晝夜又ハ夕飯の時ニ當りてハ近臣ニ教典史記を讀ましめ之り此の如くして査理曼ハ多端の職務を取行ひ且つ身體の運動ハ文學ともに之を學ぶを得多り

路易（ロイヒス）ルデボン子ールを父ニ繼て帝となりしとハいへども其人と為り教門ニ迷て政事を取行ふの器量ふく在位二十六年の間徒ニ國風を和げんことを謀りしのみして國中更ニ治まらず其殂落ニ至りて三子國を爭ひ嫡子ロテール（ロテールス）を帝號と稱しなれども査理路易の

二弟兵合せて之をホンテ子ールの野に打破り時に紀元八百四十三年に至り三子十一年あり後二年即ち紀元八百四十三年に至り三子ヘルドンに於て和睦を為し査理ハ佛郎西王とあり路易を日耳曼王とあり ロテールを伊太利其餘路尼里尼二河の邊りある小地方を領しあり是に於て乎佛郎西日耳曼始めて二國に分れる査理曼血統の佛王を「カルロウィンヂアン」朝と名つけしが當朝も亦前朝の如く暗主暴君のみにて説くに足らざる譚もなし此の如き君政を行ひしれば佛國大に亂れ遂に紀元九百八十七年に至りヒューカペットといふ者佛王の位を簒しあり史家此時まで古昔佛郎哥人の史とふし此より後を當今佛郎西人の史とあり

「カルロウィンヂアン」朝佛郎哥王即位の表

王の名	紀元
ペピンルブレフ	七百五十二年
査理曼及びカルロマン	七百六十八年
査理曼獨り王とあり	七百七十一年
路易第一ルデボン子と称す	八百十四年
査理ゼバルド	八百四十年
路易第二ゼスタンメルと称ス	八百七十七年
路易第三及びカルロマン第二	八百七十九年

カルロマン獨り王多り	八百八十二年
査理（ヒヤルレス）ゼベット（Zebedee）と称ス	八百八十四年
巴勒（パリス）侯イウデス（Eudes）又ヒユー（Hugues）ハ	八百八十七年
査理第三（ゼルシンプル）と称ス	八百九十三年
ロベルト（イウデスの弟）	九百二十二年
ボルゴンヂーの（ブルゴンヂー）ロドルフ	九百二十三年
路易（ルイ）第四（ルドルトメ）と称ス	九百三十六年
ロテール	九百五十四年
路易第五（ルイ）ゼラヂー（Gerardi）と称ス	九百八十六年

第二篇　回々教の徒威を東西に奮ふ事

査理曼の時に當りて回々教を印度河（インダス）より大西洋（ヒスパニヤ）まで弘まり其國四に分れ是班牙（スペイン）にコルドバ（Cordova）ハ回國（アラビヤ）となり亞細亞（アジヤ）埃及（エジプト）と「アバシード」朝回王の國となし亞弗利加（アフリカ）の北地にメキンス（Mequinez）カイロー（Cairo）アンの二國となり

紀元七百十年回將モザの屬將タリック五百人の兵を以てギブラルタル海峽を渡りて是班牙海岸に上陸し其翌年即ち紀元七百十一年に於てタリック一万二千人の兵を率ひて維西俄的（ウイレゴット）人とセレスに戰ひ大に之を破り

ーるゞ維西俄的王ロデリックハ逃んと欲し誤てガダル

矢野舎蔵本

キウィル河に陥り溺死したり田将モザハ屬将の勝に乗
りて盡く維西俄的人とアストチュリアスの山地に追ひ拂
ひ遂に是班牙と平らげたり
ガダルキウィル河の邊りなる一都城コルドハを程なく
是班牙田國の都會となりたり田く教の徒是班牙の境
外に出て査理馬突耳の為に追拂はれしことハ既に第
二巻に述べたり後北北諾査理曼二王の為に又も追拂ハ
るる程に田こ教の徒ハ是班牙の北地に居ることと
得ざりしとハいへども此國の中國南地に於てハ其威と
奮ひ寺院学校を建て大に道路を切り開きたり然る處
亞剌伯オンミヤット朝滅びしのち此朝の一族アブデル
ラマンと云へる者難を避けて是班牙に到り此地の田民
と説きて亞剌伯の新朝に背かしめ遂に獨立の一田國
を起したり是をぞ即ちコルドハ田國の權輿なり時に
紀元七百五十五年にして此時より歐羅巴田國史記の
面白き條となれり
「オンミヤット」朝の滅びたるや「アバシード」族王位を簒し
たる此族ハ馬痾美德の叔父アバスの後胤にして此朝
を紀元七百五十年より千二百五十八年まで凡そ五百
餘年の間滅びざりし此朝の諸王の中にて最名高き
をハローンアルラシット又アロンゼヨストとも云ふ此君を紀元七
百八十六年位に即き八百零八年まで在位したり「アラ

ビアンナイッ」と云へる面白き小冊あり數其名を載せあり此朝の時回國より於てチクスリ河の西岸より都を建てあり之をバグダッド城と云へり「アバシード」朝諸王之より都し數百年の間うるはしく其威權を奮ひうるハローンをいまだ位より登らざりうるとき大將として

ボスホリュス東帝の國をを攻めうるより女帝イレーン之を恐れて和睦を乞ひ七万粒金の租税を獻せんことを約しうれバハローンを稍之を承諾して歸陣しうる時より紀元七百八十一年ありハローンの回王となりうる後も亦此租税を取立るが為より八度ボスホリュスを攻めうるより

去る程よボスホリュスをニシホリュスと云へる者女帝イレーンを廢して自ら帝と稱し即ちハローンより書を贈りしより將棋の言葉を用ひうる其文より云へる女王駒の名女帝は譬へて足下を城駒の名我將棋の飛車の如きうるを用ひし歩駒の名我歩の如しと思ひしが故より足下より屈して租税を与へうるしあれが今宜くこと我より返納せよ然らざれバ兵端を開くべしと帝の使節此書簡と共より一束の剣を回王の足下より置きうるれバハローンを微笑して佩うる名剣を拔き唯一刀より數本の剣を切り磨き顧みて書記官より向ひ答書を作らしむ其文より云へる聖教門の高師ハローンアルラシッド羅馬の犬ニシホリュスより告ぐ我是邪

教門の母を生まるる汝の書簡を讀み汝今我答を聽くことを願ふ追付我答を見ることを願ふべし此書を以て答へ

だ自ら行て征伐せんと

ハローンを答書のごとくボスポリュスを發行し小

備も（アジア）亞細亞を亂妨し其時東帝ハ租稅の金をハローン

及ひ其諸子の頭を印せんことを約し稍く和睦を得る

ハローンを西帝（ヒロルレヤン）査理曼と厚く交り且つ又バグダット城

を多く詩人學生を招き集めて査理曼と相競ひしかば

ハローンの時より亞刺伯（アラビヤ）を文學盛んを行はれ

ローン嘗てバルメレデスと（ミヽヽヽ）いへる黨を鏖（ミナゴロシ）をしより其

中を頗る忠義ある宰相二人ありしかれぞハローン

一生の過ちをハローンを紀元八百零八年を反賊コ

ラサンのサタラップを征伐し名時を當て斃しかり

此年より紀元第十紀の中頃田王ラヂ（又アリメ）ツ（第四）の世を

至りしを此君紀元九百四十年を於て盡く政權を「イミ

ラルオムラ」官名マホメットベンライクを委任しかるより

田國の形勢一變し此時より人皆此官位を登ることを

爭ふを至まり紀元九百四十五年より千零五十六年を

で凡て一百餘年の間ボイデス氏族此官職を世をし威

權を奮ひかり

然る處を北狄セルジュクトルクス人の酋長トグルル

ベー其種族を率ひて此國に到り自ら「イミラル・オムラ」と稱し直に全國を打靡(クダ)き遂に「ボクダド」朝の回王を廢せざりし此の如き形勢にて紀元千二百五十八年に至りて此歳モンゴルタルタル人此國に到りバグダット城を攻め取り回王アブダラを殺しこゝに是に於て「アバシード」朝滅びぬ

第三篇

日耳曼帝國興る事

(要) オトゼグレート帝紀元九百三十六年より九百七十三年まで此國を文配せ

紀元八百四十三年ハルドンの和睦より日耳曼國(ゼルマン)佛郎(フラン)西國と分ち里尼(ライン)河を境とし爾後凡そ六十八年の間査理曼(シャルルマン)帝の一族日耳曼國を文配し紀元九百十一年に至れり

此時査理曼一族の朝滅ひ日耳曼國人フランコニア公コンラッドを撰て其國王とせしこゝ然し佛郎西に「カルロウィンデアン」朝(査理曼一族の朝)の滅ひしは是より遙かに後の事なり抑日耳曼佛郎(ゼルマン フラン)西兩國の民もとい同しく佛郎哥(フランク)人にして西に住しい佛郎西人となり東に住しい日耳曼人となりしなれども日耳曼の民い尚一致せざ

サクソン　チュリンデアン　フランコニアン　シュアビアン　バ

ハリアンの五部を分ち此諸部の君侯い皆日耳曼王と選ぶの權ありの故を此時代より第十九紀の始めまで此時日耳曼帝の号滅び澳土利帝と為る　日耳曼の帝王い父子相傳ふこと能いざりき

紀元九百十八年顯理ゼホウレル コンラットを繼て王と為きり是ゼサクソン族日耳曼王の祖ありの顯理の位を即くや盡く日耳曼の諸種族を打従へ以て王の權威を大ならせんと欲し直をアレマニアバハリア両國公を打従へ又ロルレーンの地を取りを多ありの者まと此君在位の時を當り匈牙利國人頻りを日耳曼の境を侵しくれバ顯理を國境を數多の城砦を築きて之を防ぎをり此城砦のうち製造貿易の盛んなる都府とありしをの多し然りとあるに顯理を匈牙利人を防ぐの為を騎兵を數多作りをり故を或る人の説を云く騎士の義侠を尚ぶ風俗い此顯理の始めしありと余思ふに然らざるの風俗の興きるを豈一人一朝のことあらんや是れ蓋し日耳曼國人舊来の性質の盛んなるありしなるべし但し顯理ハ騎士の巧みなるを以て此君の時より其風俗の別して盛んなるありしい必定ふり

紀元九百三十六年顯理薨し太子オトエーラシャーペルを於て位を即くコローン マエンス二呼の教魁侍坐し

ゐりオトの位に登りゐ日耳曼の大諸侯大半謀叛しゐ
りゐれども皆オトの智勇に勝つこと能はざるを察し
容易く降服しゐりオト即ち「コントオフゼパレース」「マ
ルグレーフ」の二官を置きて之を諸侯の國に遣し置き
其謀反せるに備へゐり
オトハ教門を愛するを以て心を伊太利に傾そそぎ其
上五十餘年の間日耳曼の王は西帝の號を稱しゐるえ
のゐゐりしグオトを此尊位を踐んことを欲しゐれば
殊に伊太利の事務に關ることを悦びぬ此尊號や伊太
利の大諸侯皆之を得んと欲するを以て羅馬教公も決
しゐゐるを尤教公の大目とする所ハ教公の為に伊

太利の諸侯を從へ亞剌伯の寇賊を防ぐに足る一勇
將を撰んで帝號を授ゐんと欲してゐり
伊太利王ロテール薨しゐるが其夫人アデレードを容
顔美しくて世に名高き婦人ゐりゐれバヘレンガルと
いへる者之を夫人とゐして其國を押領せんと量り遂
にアデレードを捕へしグアデレードを之に從ゐて竊
にオトの許へ人を遣して救ひを乞ひゐるアデレ
ードの如き美しき婦人に救ひを乞ひしことゐれハオ
トを只管悦びに堪えず即日兵を擧て伊太利に進發し
直にロンバルディーを平定しゐり時に紀元九百五十一
年ゐりし是より先きオトの先妻エジスを身罷りしと

以てオトをアデレードと夫人とふしその國と并せけり

後四年に於て匈牙利人舉國の兵を以てオーグスビュルグ城の近傍に寇しるるオト自らこれを征して大に敵を打破りしかば匈牙利人を辟易して退き其後絶て日耳曼に寇をすることあらざりき此時オトを日耳曼と匈牙利との境なる州郡の民に兵を演いしめ匈牙利人の侵寇に備へり実に堅固なる上にも又慎をを加ふるとなりあるきあり オト又スクラホニアン人とイルブオーデルの両河の間に破り遂にウィスチュラ河に至りき

紀元九百六十一年オト伊太利に進發を米蘭城に於て倫巴爾王の位に即き傳来の鐵冠を受け其翌年第二月羅馬城に於て教公ジョン第十二オトに西帝の冠を献しにき昔し查理曼西帝の位に即きし時より是に至り て凡て百六十二年なり

去程に教公ジョンをも又オトを廢せんと謀りしに謀發覺されしかば餘義なく出奔しるり僧官等即ちレオ第七を立て教公となすそ其後オトハ教公と共に伊太利の無道なる諸侯を盡く廢し僧官として各郡を支配せしめきり是に於て伊太利の形勢一變し久しく亡びたる自主の風亦興りぬ後伊太利に共和政治の盛んなるもしそ此變革よりなり

オト後又伊太利(イタリー)に趣き此に居ること六年にして日耳曼(ゼルマン)に歸り程ふく殂落し時に紀元九百七十三年あり

此後日耳曼の國歐羅巴(ヨウロッパ)諸國の冠たり是蓋しオト等諸代の君の力あり且つ印刺の天下に益ける耶蘇正教「プロテスタンチスム」の人民に利ありしに其始めは此國に起りしと思ひ日耳曼にオトの如き英賢の君起り西帝の位を得るに吾等英人(ヒリス)に更に天下の人皆豈榮とせざるんや

オト第二オト第三顯理(ヘンリー)第二相繼て日耳曼(ゼルマン)帝となり嗣絶えし國人即ち「フランキス」族の祖コンラットを立つ時に紀元千零二十四年なり

サクソン　フランキス　両族日耳曼(ゼルマン)國帝即位の表

帝の名	紀元
コンラット第一	九百十一年
顯理(ヘンリー)第一	九百十八年
オトゼグレート	九百三十六年
オト第二	九百七十三年
オト第三	九百八十三年

顯理第二	千零零二年
コンラット第二	千零二十四年
顯理第三	千零三十九年
顯理第四	千零五十六年
顯理第五	千百零六年
ロテール第二	千百二十五年
無帝の間	千百三十八年
コンラット第三	千百三十八年
フレデレッキバルバロサ	千百五十二年
顯理第六	千百九十年
ヒリップ	千百九十八年
オト第四	千二百零八年
フレデレッキ第二	千二百十二年
コンラット第四	千二百五十年
維廉（ウイルレム）	千二百五十年
無帝の間	自千二百五十六年 至千二百七十三年

第四篇　東帝國の事

要　ジョンヂミスセス帝の世

上に説し如く西に日耳曼（ゼルマン）帝國の盛んなるより東に亞剌伯（アラビヤ）の國の強きより東帝の國を二大強國の間に挾みて〻も尚その開化文明なること諸國に冠たり

如地尼安帝(ジョスチニアン)祖養して より一百六十年の後即ち紀元七百二十五年に於て一大事件起りその濫觴と考るに此項の東帝とレオ第三といひしが帝嘗て思ふに回教の徒諸國を侵掠して其勢の盛んなるを彼等の強きが故なりけるに耶蘇教の惡しきに由てあるべしと思ひしかば像と拜する舊来の惡風を除き耶蘇教門を正しき教門とふらんと量りしに耶蘇教の諸國之を悦びざるもの多く終に天下の亂となりあるに像を拜せんと欲する者を拜像徒(ドーロイ)といひ像を廢せんと欲する者を破像徒(ミコクラスタイ)といへり羅馬教公(グレゴリー)第三像を壞つを非とし像を壞ちある者い真神を拜することを禁じ人と交ることを許さざらんと固く之を禁じ給へども兩徒の爭更に止まず遂に羅馬(ローマ)の寺院と剛士但知脳布(コンスタンチノープル)爾の寺院と相別まて互に爭ひ競ふこと一百二十年に及ひ紀元八百四十二年に於て諸國の高僧剛士但知脳(コンスタンチノープル)布爾に會し遂に拜像の説勝に帰し此宗旨分れしを今希臘教(ギリシヤ)と魯西亞(ロシヤ)國に盛んなる宗旨起りしなり此宗旨分れてより羅馬教公を益西帝(日耳曼帝)に依頼しられば西帝の勢愈歐羅巴(ヨーロッパ)に奮ひ紀元八百六十七年より千零五十七年まて「マセドニア」朝の君東帝なりしが此間東帝國い盛んなりし此國に亂き入り多く一夷族耶蘇教に變して遂に東帝に歸

服しなることなり又都より絹糸の製作毛織の貿易盛んなりて西は日耳曼北は魯西亞の果に至りて此地の産物を珍重を然のみならず東方の産物も皆必ず此地の市場を經て歐羅巴に渡りなり

十六年至九百十一年　自九百六十九年至九百七十五年の二帝

「マセドニアン」朝諸帝のうち最賢なるをレオ第六自八百八十九年の二帝ジョンジミスセスなりレオ帝は理學に長し軍制論を著はしジョン帝は在位六年の間所々に武功を顯し國君と擧られたりジョン帝の時魯西亞の將スワトスロースオルガが河より多脳河までの諸州を打靡かして剛士但知脳布爾城近く攻め寄せたり帝自らこれを伐て大に敵兵を打破り北ぐるを追て多脳に至り其本營に打入りしかば敵兵を殘り少なく討ち亡ぼしかくて這く本國へ逃げ去りなり帝都に歸り即ち三軍を率ひて都内を行列し勝利を賀しなり此時帝は肥馬に乘り頭に金の冠を戴き手に桂の冠を持しとぞ

東帝國の政を國帝擅權の政にして國帝は奢侈を極む今我他國の使節の天子に謁するときの有樣を左に示しこれ奢侈の一例とあり

使節の帝宮に入るや警固の兵をもて立派なる甲冑をよろひ両側に列をなし其人員幾千といふことを知らぬ旌旗翻飜として天に閃めき然も其旗は善美の絹にて

製しあり斯くして百爾西亞の花壇を敷き其上に蕃
薇と沒藥とを撒きちらし薫風馥郁として恰も仙境に
入りしかと怪しまるゝて使節謁宮の石階に登るや
否や長く垂れて已が脚下に及べる幕をつづくりこう
引きちぶるゝの折り時に一個の美しき坐席を現出せ
使節驚て前面を視上ぐれば國帝を紫と白との禮服を
着し金の椅子に倚らせ給へり其側に在せる后妃にして
言葉婉しく容姿艶麗実に人として魂爽飛越せしめり
とぞ其坐の周りに朝臣列坐し皆白衣を着あり帝坐
の後ろに金にて作れる樓閣の木けりて其枝に小人の
作りあり美しき小鳥飛び戯れ帝坐を守護しあり金銀

の両獅を跳りて大聲を發し宮内に聞ゆる喇叭の聲ハ
吹く毎に調子を高くせり夷の使節ハ皆之を視て喫
驚せざるをなく唯默然として平伏しあり許りあり明
耳曼の騎士の此國に使せしものハ流石ダに地に俯を
ことをなうりしとゝへども其美に感動せられて平生
の勇氣を忘れ先きの荒いも覺へずくきわどありしと
ぞ
嗚呼此の如く著侈を極る國の豈滅亡の時あらんや
即ち那蘇降生の年より千餘年を過きて後十字戰と
ハる軍起り此國遂に滅亡に至れりとて次の卷に説く
と見るへし

「マセドニアン」朝の東帝即位の表

帝の名	紀元
バシリユース第一	八百六十七年
レオ第六	八百八十六年
アレキサンドル及剛士但丁第七	九百十一年
ロマニユス	九百十九年
剛士但丁第八	九百二十年
帝五人ならび閉	九百二十八年
ロマニユス第二	九百五十九年
コンスタンチノポリユス第二	九百六十三年
ジヨンジミスセス	九百六十九年
バシリユース第二及剛士但丁第九	九百七十五年
ロマニユス第三	千零二十八年
ミカール第四	千零三十四年
ミカール第五	千零四十一年
剛士但丁第十及ゾエ	千零四十二年
テオドラ	千零五十四年
ミカール第六	自千零五十六年至千零五十七年

第五篇　ノルスメン人の事

紀元九百十一年　ロルロ等佛ノ

ルマンヂは居留を

初め查理曼帝一日地中海を望みノルスメン人の船を遠見して涙を流されゝ是皇子孫の此夷の為に苦められんことを慮てなり

此夷を戰と好み自ら海魁と稱し年毎に春風吹きて海面の氷の解くを待ち蛇の形に似る船に打乘りてスカンヂナヒアの山國を棄て南又は西南の海中を轉航しゝ今椰威及びノルマンヂといふ所の舊此夷の住し處なれば斯く名つけしなり

查理曼の時ノルスメン人の又ルベ河に入らんことを恐れ河の口に堅固なる城を築きゝ今のハンビュルグ

城是なり前にそ自國に内亂多かりしを以て諸國に屈せるの暇なかりゝ或書に云く紀元七百四十年に於て連馬王ハロルドの一族ブラーバルラといふ處て瑞典王シギュルドの一族と大に戰ひハロルドを兵敗れて身死し遂に以てシギュルド遂にスカンヂナヒアに君なり

夫れよりノルスメン人の北海を亂妨して諸國を腦まさるに至りシギュルドの子レグナル、ロッドブロックリンヂスハルンを亂妨しゝとき サクソン人イルラの為に雪に責に逢ひしゝ蛇責に逢ひしゝレグナルは更に臆せる氣色もなく軍の歌を歌ひて死しゝとぞ

ノルスメン人の兇猛なることを言語を以て述べ難く其敵を突入るるに臨ひ恰も兎の怒るが如し加之ふるゝ其信せる宗旨も其好める歌も皆軍を勸めるる是を何故ぞとあれば其信仰しるるオヂン神いもと北國の勇士ありしと言ひ習いし天堂第一の樂を敵の頸を盃に代へて美酒を飲むことありとし且つ戰場に討死しる者は非されば天堂に趣くこと能はざるとあり酒宴の席にて歌ふも亦勇氣を勵まん歌ありとぞ然るに耶蘇教の僧エンスガルといふ者僅數人の僧を從へてスカンヂナヒアの國に入りメーラルンの洋ふるビオルン館に於て耶蘇教を說くが教門に歸する者日に多く後に遂にもとの宗旨を押し倒すに至れり

偖もノルスメン人い諸國を惱ましるるが就中英佛の兩國を其地北海に鄰るを以てノルスメン人の為に惱まさるること最多ハロルドの挪威に王為し頃自紀元八百六十三年至九百三十一年英國の王ハアルフレットといへる英傑の君ありしかばノルスメン人い英國に冠を奪ふと能はざりしが其子孫の代に至りて英國の政又衰へ來りしかばノルスメン人遂に此國を攻め取りカニュートといへる酋長を立て英主とふしそれより二十四年の後ノルスメン族の王嗣絶へ再び本國の人位に

登りゝるが程あくノルマンヂ公維廉の為メに攻め滅ぼされゝり

ノルマンヂの人を下るも説く如くノルスメン人の居留せるゝのゝり然し維廉の項に至りていもゝや佛の風俗に染ゝあれーゝがゝゝふ兇暴ある海賊にゝ非ゝしと却て鎧を着る騎馬武者にてぞゝりゝる維廉の英國を攻め取ゝると委しくゝ西洋易知録外篇にゝり

紀元九百零一年ノルスメン人龍を画きゝる小船數十艘を以て佛國に来り塞納河の上流に泝りて攻め寄せゝり此時の船大將ゝロルロと云ふる者ありしそも

ノルスメン人ゝロー正ン城を抜きゝを巣穴とふして數年近郡を侵掠しゝり去る程にノルスメン人ゝ人數日々に増加しゝに加ふるに佛の農民等ローヱン城に集り来りて降を乞ひし程にノルスメン人の勢益盛大とゝり巴勒の都も二度まで囲みゝり佛王查理ゼンブル大に之を恐れブト河の邊ゝるシントクレール城に於てロルロと對面しゝをノルマンヂ及びブレターンの地に封しノルマンヂ公と號せしめ佛國諸侯の列に加ゝしむロルロ之を諾しゝり時に紀元九百十一年ゝり之より前にノルスメンの一酋長ハスチングスと云ふ者佛國に居住しシャルトルス侯に封せゝり

ノルスメン人の佛國に来る佛國に益ふしとすべし今佛國の船將船客の名高き者は往くノルマンヂの地に起きる者多しロルロに從ひ来りし者佛人の女と緣組をふしくるより北國の鄙語を棄てゝふ佛語をつゝひ遂に唯船の語のみぞ北國の言葉を殘し用ゐる至り今に至り佛の船將ノルスの船言葉を以て水夫に喻し聽ゐをこゝろとしたりといふ其ノルスメン人は又其好める航海の業をも打棄て農民となりしが尚勇を好める舊俗を棄つることなく皆悅で義俠の風を學び詩人も亦勇しき詩をを作り國民の勇氣を勵ましけりされば後十字戰の起るに至りてノルマンヂ人最勇功を顯はせり

ノルスメン人は唯海上より熟を張りしのみに非ず歐羅巴の東北にも侵入し二城を築きゝ一はイルメン湖邊にありてノフゴロットといひ一はドニープル河邊にありてキーフといふ紀元八百六十二年酋長ルリックゼゼストといふる者ノフゴロットの王となりは是を魯西亞國の始原とあるルリックの時宰相オレグキーフを取りて國を廣めるルリックの子死し其妻オルガの時希臘教國に傳いてオルガの孫フラミル第一の時に至り王自ら此宗旨を奉ず紀元九百八十年之を國教と定めるルスクより七百三十六箇年の間その子孫魯西

亞國を支配しヘオドルと云へる人に至りて其族滅ぶ
紀元八百六十二年より千五百九十八年に至る
紀元千零十六年耶路撒冷より歸りくる數個のノルマンヂ人伊太利南地にあるサレルの戻を助くて亞剌伯人の賊船を逐ひ拂ひくるノルマンヂの國にて之を聞き我も我もと爭て伊太利に集ひ來りぬ此時に當りて東帝國の政府にて悉西利より亞剌伯人を追拂て島を取返さんと欲しくる折ありしかばノルマンヂ人等此國に雇れ居りしが賞の少きを以て一同に怒りを起し東帝に背きてアヒュアカラブリアを攻め取りくる時に紀元千零四十年にあり此兵の隊長はノルマンヂの小

ーテヲル人の二子にして兄の名はロベルトギスカルドと云ひ弟の名をロヂルと云へりギスカルドをアピュアと取なしてアピュア王と稱し二度希臘を侵しくり初めの時は紀元千零八十一年にて此時のヂラグー合戰は古今大戰の一にありき弟ロヂルを亞剌伯人と悉西利より追拂ひ嶋と打平らげ其子に至りて遂に此島の王と稱しくり

第六篇　查理曼帝宮中の風儀を述ぶ

查理曼は平生麻布の襦袢を着股引を穿ち其上に鉛總の付きたる長き服を着し脚に木綿を卷き足に革の沓

と履きゝ冬ハ毛皮の短衣と着又其上ハ青き長外套と掛け金の帶と以て金柄の劍と帶びゝり查理曼を常ハ此の如く單薄ゝる裝と為せしとゝへゝも外國の使節と見るときハ立派ゝる衣裳と着し金玉と帶びしとぞ查理曼を佛郎哥風の服と好むこと甚しゝりゝれば一生のうち羅馬風の服と着せしハ僅ハ二度ハ過ぎゝりしとゝ

一日查理曼近臣と從へて獵ハ出でられしゝ一天忽ち黑雲と生し大雨甚しく降りしゝば美服と裝ひゝる近臣等ハ大ハ之と苦とゝるゝりしゝ查理曼を常ハ美服と好まぎりゝれば此日も羊皮の麁服と着せゝ甚しと以て更ハ之ハ苦むことゝふく近臣の狼狽惑ふと見て笑ゝれゝりゝて查理曼を宮中ハ歸りし處殊更近臣の退出と許ゝん其服の盡く濕りひ損ゝると待ゝりゝ翌日查理曼近臣と召し昨日の服と着して出仕ゝへしと命せゝゝしゝば近臣皆迷惑ハ及び只管奢侈の愚ゝゝ後悔しゝりとぞ

查理曼ハ食ゝるとき四肴より多く食ふことゝふし最も新鮮ゝる獸肉と焙りゝると好まれゝり食事のとき侍臣として史書又ハ眞神記（オーヒュスチノ）の書せゝる教書（ノ）と讀ましめゝり夏日ハ晝食後ハ數箇の果實と食し唯一杯の葡萄酒と飲ゝ二三時の間午睡とゝりゝ尤酒ハ醉ふこと

た甚だ惡まれたり夜分は眠ることも少ふし或時は一夜は四五度も起きしことありしこそ毎朝衣裳を着る間も惜しみて此間は臣下の朝見をぞ受られたる

査理曼(シャルルマン)は臘丁(ラテン)語は長し少しは希臘(ギリシヤ)語も知り且つ甚だ天文學を好みたり故は諸國の學者宮中に集まり帝は國王の尊きを棄て親友の如く此人々と交わり共に書を讀み互に討論を為しかり然りとも此人々の長ずることなければ帝則ちこれに從て其所長とを学びたる故はピサのペートルを文法と帝は教えアルコイン(附記)は見を論理天文を教えたり査理曼の晩年は好ひ佛郎哥(フランコ)の文字廢まれて羅馬の文字一般に行はるるに至

りしかが帝則ち羅馬字の手本を枕の下に入れ置き夜中目の覺めたる毎に其文字を學びたることぞ豈感歎に堪えざるんや

査理曼(シャルルマン)の公主は行狀惡しきを以て帝常にこれを憂へられ是帝宮中に在るときは公主も侍女の事を務めしめたり尤帝の旅まるるに公主も王子も皆これを引連まて出られたり

アキスグラニュム城(今のエクスラシャペル)は査理曼の領國の北都にあり此城はもと羅馬人の建てし所なり査理曼は此地の形色を愛し數此に趣こられたり

査理曼此地は天下の人を驚ろかさんと一大宮殿を建て

んと欲しくゝ時は羅馬教公いうべナ城（ローマ）より「ポルヒリ」石の圓柱并に切嵌細工の敷石を徙して之を帝に贈りくゝ帝い諸國の職人を集めく此宮を造らしめしかば速に成就しゝくゝ青銅を以て門とふし大理石を以て壁とふ〳〵壁の内にい廳堂長廊許多にして書庫学校戰場浴室に至るまで一とし備はらざふし

學校いアルコインに委任して之を支配せしめゝ書庫にい許多の書を集めしを以て今に至るまで之を為に昔しの珍書の傳いまるものの多し査理曼（シャルレマン）い國中に学藝の盛んなることを欲し只管之を勸められい諸州各学校を建つるふ至まり

査理曼（シャルレマン）い難事に當りて賢人勇者に議せりといへども常にい議事官を置うきくゝ然し「コーントオフパレイス」（コンテ）訟獄の疑しきを決する官を置られくゝ佛郎哥（フランク）人い一年に二度會合して法律を取極め明年の租稅を定めくゝ二度の會のうち前の會い後の會より肝要ふゝ後の會にい唯租稅の未だ收まらざるを收めしもうを專一と為しにくゝ

西洋易知録巻之三畢

西洋易知録巻之三附記

第三世開人の姓氏

アルコイン　約育（ヨルク）の人○ベードの門人あり○査理曼（シャルレマン）の宮中まいりて帝を教えあり○其著を所詩集教書等けり○紀元八百零四年に死を

ポールロワル子フリット　紀元七百四十年頃に生を七百九十九年に死を○伊太利（イタリー）の人なり○初め倫巴爾（ロンバルト）王デレデリュース（ヒャルレマン）に仕へ後査理曼の宮中に趣き希臘（ギリシ）語を教えあり○詩學史學に長を○著を所倫巴（ロンバ）爾（ルト）國史けり

イヂンアルド　西佛郎人（フランス）あり○査理曼（シャルレマン）に仕へて書記官とあり○査理曼の傳其他史書を著せり○紀元四百四十一年頃に死せり

ジョンスコチュスイリゼナ　愛蘭（アイルランド）の人○常に教法心理の両科を好む○第九紀の中頃に佛郎西（フランス）に在り○紀元八百七十五年に死せり

アルフレット　英國（イングリス）の王なり○教典及ひべードの史記エーシップの野史とサクソン語に飜譯せり○書生と愛せり○紀元九百零一年に歿せり

アウィセンナ又名アベシナ　紀元九百八十年ボクアラの近邊に生る○醫術理学に長せり○其著せる「カノン」と

云へる書は數百年の間世に行はれし名高きもの多し○其他書を著すこと殆一百部あり其中に名高きは「レメダーレ」と云へる理学書なり

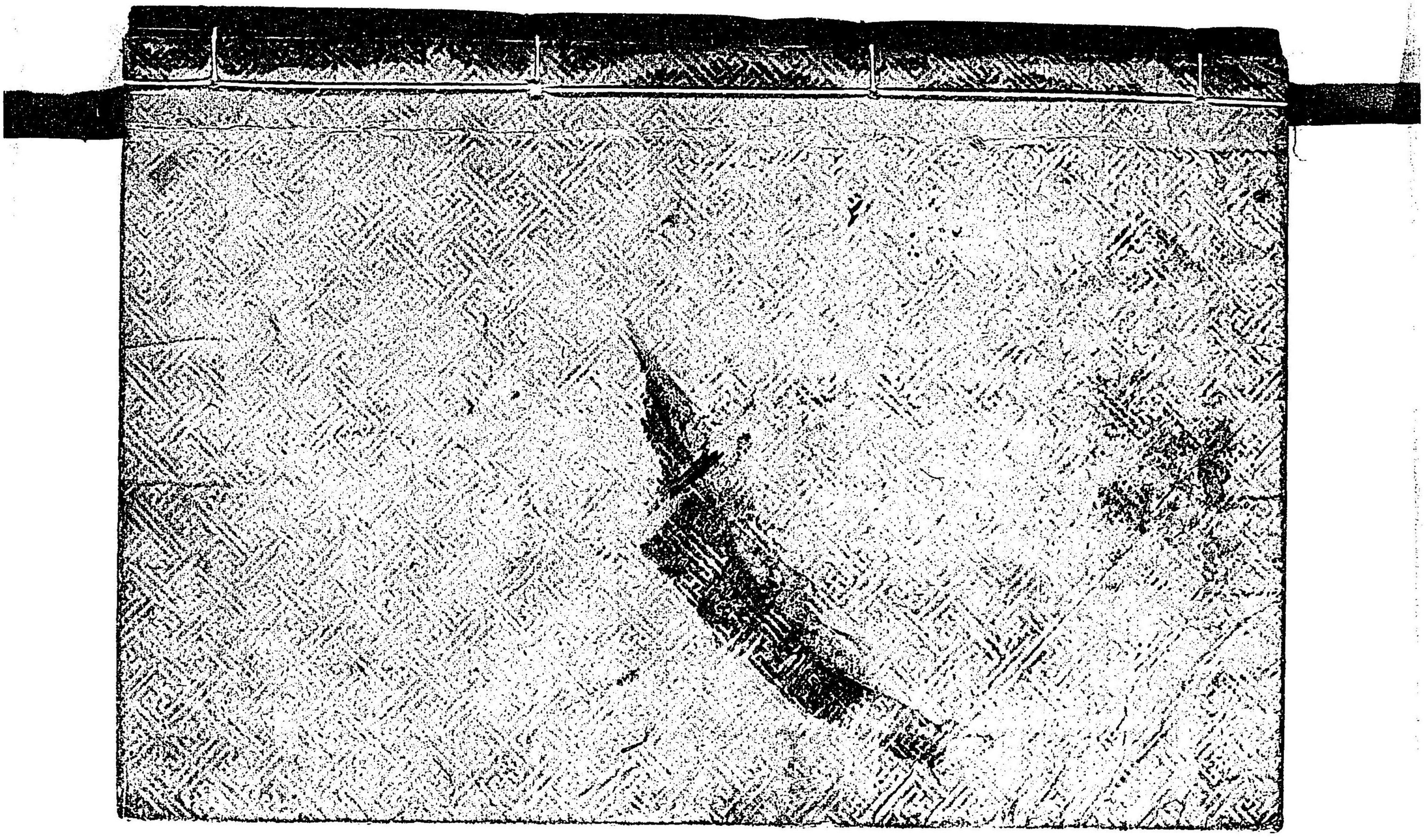
ギドダレッゾ　第十紀の末にトスカンニのアレッゾに生る○「ベネデクアン」の寺の僧なり○音樂の事に委しく「シクロロギュス」と云へる音樂を教る書を著せり○第十一紀の中頃に死せり

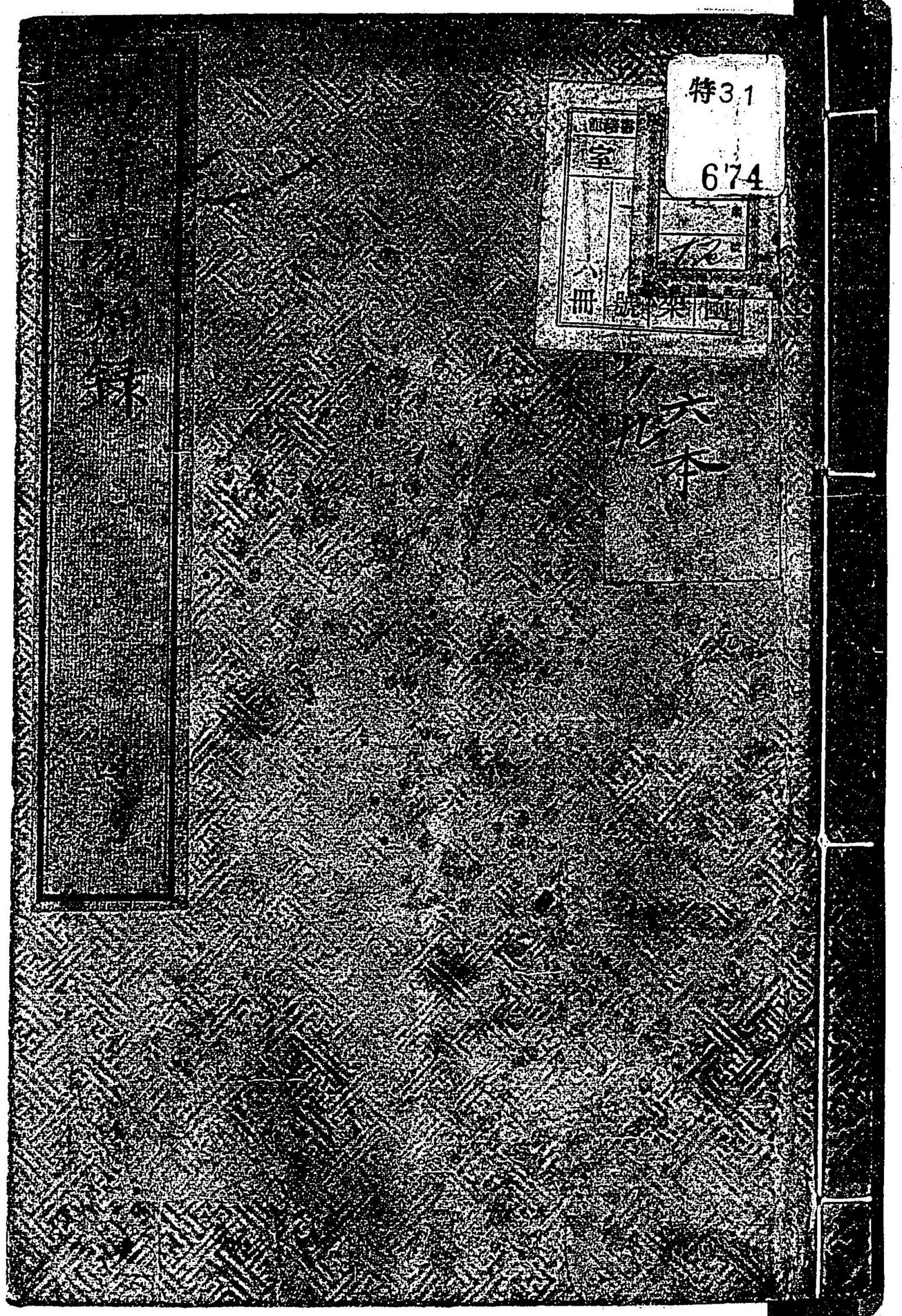
第三世の紀事の表

紀事	紀元
査理曼佛郎哥の王となる	七百七十一年
査理曼の兵ロンセバルレスを於て敗北せ	七百七十八年
ハローンアルラスシット回教の徒の王となる	七百八十六年
僧徒マスを會せ	七百八十七年
睫人始て英國を上陸せ	仝
イレーン名東帝となる	七百八十八年
査理曼羅馬城を於て西帝の位を即く	八百年
査理曼殂せ	八百十四年
イグベルト英國を一統せ	八百二十七年
ホレテホールの戦争	八百四十一年
査理曼の三孫ベルヂュンを盟ふ	八百四十三年
ルユリック魯西亞國を建つ	八百六十二年
アルブレット英國を王となる	八百七十一年
アルブレット殂せ	九百零一年
ノルスメンの長ロルロルマンヂ公となる	九百十一年

日耳曼帝オト位ヲ即ク	九百三十六年
亞剌伯「イミル アル オム ラ」ノ職ヲ置ク	九百四十年
オト西帝ノ位ヲ即ク	九百六十二年
東帝ジヨンジミスセス位ヲ即ク	九百六十九年
オト殂セ	九百七十三年
ジヨンジミスセス殂セ	九百七十五年
佛人ヒューカペット王位ヲ篡ヒ「カペナアン」朝起ル	九百八十七年
嗹王カニュート英王トアル	千零十七年
ノルマンヂノ人伊太利南地ヲ侵掠ス	千零四十年
イドワルドゼヨン「ヘッシヨン」英王トアル	千零四十一年
土耳其人バグダットヲ取ル	千零五十五年
伊太利國ヲ「ゲルノ」「數公」「ギベリン」ノ二黨起ル	千零六十一年
土耳其人邪路撒冷ヲ取ル	千零六十五年
ノルマンヂ公維廣英國ヲ取ル	千零六十六年
ジュラヅノ戰爭	千零八十一年

西洋易知錄卷之三附記終




特31
674
室
八冊
12
六本